

No 2.

NATIONAL *Thoughts* **NATIONAL**

Syracuse to New York

Life till 1923 -

No. 3758

○ 知平解のま装ひ名

○ サルフモ平とよのはギリヤの流じ

○ 賢良とてうたのむ耳可通とてん

○ 意味を有てぬ

○ 一に流と見えし

○ 此と糾強し

○ 之と語をし情流し

○ 叢父の計報は青天の霹靂

○ ちんちん

○ 虫の知とせ ひのま 杖もたからん

○ アんヌコナ

○ 厨の厨の厨

○ 東の東の東

○ 小丘の上の音の音

○ 綺りし虚もち御殿

○ 新れとて昔の昔

○ 何れも

高と海もえり 西の空に

心 曇りのすゝたの 月

夜を 暮れやうと 月とあり

月

この十のうハラスエトと一板せんし

一板せんしすは二の板のうは

二の板のうは三の板のうは

三の板のうは四の板のうは

四の板のうは五の板のうは

五の板のうは六の板のうは

六の板のうは七の板のうは

七の板のうは八の板のうは

八の板のうは九の板のうは

九の板のうは十の板のうは

十の板のうは十一の板のうは

十一の板のうは十二の板のうは

十二の板のうは十三の板のうは

十三の板のうは十四の板のうは

十四の板のうは十五の板のうは

十五の板のうは十六の板のうは

十六の板のうは十七の板のうは

十七の板のうは十八の板のうは

十八の板のうは十九の板のうは

十九の板のうは二十の板のうは

。父に先ひたり、鎌年猶ほ凡
前々燈の如し

。凡々長足の火、悴の虫世を待

つこと十二、債桶者より攻

めをせられろくは、直百先 絶えぬ

長遠邊、新相の如し

。時々ナシセスと云ふ、秋山と

固くしは、知事 月夜す

のま人の通、終ん

セラキエス

。岡崎のまきとくも昔の華派

あかん。

。残生とて讀献さんとする。

。淋瀝棟樑、暫息しむゆ

。四時とさう、鎮有文の近家

。莫大塵方丈の申と馬せむるまじ

セラキエスのか就判所之所ん集

まうん時のは、流舟さんにも大流

。心の中、寂々せんものなとも、

ものキナコ(子)あうな類とす

。江い原と、賑わひぬひりく

しそ、たらん

。雲散月明、た、
銚子、
銚子、
銚子、

。実少雲とくも、
銚子、
銚子、

つた、うす、
銚子、
銚子、

セラキエス

二二

フー十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

心す鳩首しと云ふ薄さなりと云ふ

つちらん。

。左きき 蘭干 底沈 々々

。公は 急 瘵 のなり 江 甚 楚

すら 上ル 賦 政 上ニ 言 柳 楚

すら こと 甚 楚 痛 楚 楚

。言 賦 賦 陰 竹 一 七

。レイアイの 帝 の 渡り まで 沙 干 符 一

こおん 先 日 七 ちらん。

。漢 丸 二 壺 子 二 接 舎 の 舎 子 二

。霜 相 早 しく 二 淋 瀝 なる

緑 艶 休 歎 七 珍 心 なる

。満 月 甚 淋 淋 二 淋 瀝 なる

。疾 言 甚 處 色 の 大 田 字 の 甚 三 人

。疎 率 なる 所 は 秋 山 の 疵 瑕

からん。

自分は豊にこころをこころの事

とちゆうへんたよんモルしせり

。この平生んたるをゆめへレンとらふ

せこのまの女とちゆうん。ゆめのちほ。

悦生の^{カッ}麗とちゆうりうたしり

寿はたのめり

。五来申の^{ハイ}麗とちゆうびアヤに白

ときは知らぬ顔する

。秋夏はこいアインとにける般

之月又下り、と、流汗淋瀝、

病ちけを^コし^ハり、^コ病^ハ先^ハし^ハん

り、^コ病^ハ術^ハと^ハ攻^ハし^ハこ

。十時半頃にはちると、実には在る

生徒でおワイトハラスとフカトスオ

ントル姓き、^ウカ^ハト^ハス^ハト^ハ或

は、バインたりと、^ウカ^ハト^ハス^ハト^ハ或

めちゆうん

セるまア

三年

春眠 曉を覺えたり

神無月 春の来ぬは 人の世に

矢もせず 才の争ひもなし 世の事は 人の世に

自身と 世の事は 人の世に

日下 生はれ 凡の 世の事は 人の世に

すまじ 時計の 世の事は 人の世に

人生の 世の事は 人の世に 朝露

人生行路の 世の事は 人の世に

白駒の 世の事は 人の世に

零下 孤甚の 世の事は 人の世に

世の 世の事は 人の世に

と 世の 世の事は 人の世に

山 世の 世の事は 人の世に

心 世の 世の事は 人の世に

ウ 世の 世の事は 人の世に

世の 世の事は 人の世に

す 世の 世の事は 人の世に

。疎野はせとまをふ堪ふなり。瘧情

。半翁の努力徒勞に屬す、

。焦在る殿様如地下室と空箱と

掌と一とせび傳と日中飯とカモ託食

。さ山を付成しちうた。

。疎野と二人と和表協同して奮闘

やカとんか維持するこゝろを可

ちうたしうで。三月迄がトオリ

。二週下はル用度した。用度の

。理はは父の二病の爲めに和れ

帰つておぼろがぬ、とて競走人

とんがらんか、不思議にも

。此か忠告か知らせむあらた。其時

。殿父の二病日しく造り終るに

。近きつつあらたかた。時とくイサ

。かの成を刃成しとんおま報る所命

。其れをらむちうた

。イサカある所。也るやるま。三

兄
小の從
よめき
たけ
こは
た
ん

か
5
死
は
知
す
は
と
き
考
の
違

言
た
り
武
十
の
程
程
を
葉
取
り
し

生
ま
り
サ
サ
武
の
死
ま
北
部
の
片

輝
と
た
ら
ま
じ
の
こ
と
お
し
た
た

中
陰
の
海
ま
ま
い
は
お
せ
た
は
い

老
し
の
心
と
皆
老
の
朝
人

ひ
も
結
わ
も
の
存
し
を
入
う
父
の

再
の
申
存
に
違
う
の
さ
ら
う

ち
あ
、
女
の
恋
の
愛
の
り
し

父
ま
な
つ
の
心
一
再
の
解
る
死

は
ま
る
昔
の
心
の
笑
と
情
の
心
が

と
恋
の
痛
恨
胸
を
と
り
し
し

天
と
地
の
情
の
心
は
あ
り

た
り
。
父
の
心
に
北
の
心
と
ユ
ラ
ヤ
山
も
さ
る

か
ら
ち
が
大
平
海
の
心
を
さ
す

そ
の
心
を
思
ひ
お
し
思
ひ
お
し
は

そ
の
心
を
思
ひ
お
し
思
ひ
お
し
は

此の目録をきくと引帰るの處

Howe Queen

。何と考へておるかの。

。日中の女その技にそんなことするの

。博愛堂に及ぼすことなる果て人

のことでありあう。他見こはばかひぬ

。待しと暮らすと来ぬ人と

。守待の二重のうらせはあつた

。存守の海月もあつた

。他見と情らぬコエザ

。者の中舎女の可ともうと散策

。すゝことは来月と他見とはは

。からならぬ日中ひは他年さひは

。ははるうは社友組蔵の世

。なるあつたがちるの。来は執りあつた

。元麗とちるのたひはな

。五その中う麗とちるのたひはな

セロキエウス

アキ

○ 姉妹はちねと伯致はけし

さう姉妹は皆な人の道うとな

つこりんのむ 子甘に頼んと相續

○ せうまの郵先かこれ見すかじし

宗上達のたの暇に深くすりしと後

笑を洩らす、観た方よは片腹

りたせに、甚美しと軽し暇得、

○ 時はあま下旬のちうた、言ふやし

とあか散かすらと、何と考つて居

つと^{つと} ^{うら} ^{うら} ^{うら}

○ 層を流るうかづれおちうら

うひはとあひい。

○ 平上西務

○ 山形と近橋ありしは清々と執原と

とけしと。

○ 横線少々手とよあ所見え

セリキユラス大まの先達ナル。フしトギン
の上子なる。人気ヲ云ハ人ガ可クた。セリキ

中跡ノル時方と云ハことレのナ

其大す方クモニキキマシた。ハ。貴手ハ

ない。ニル中行と強マ。ト。急然ハ

往來ジ各ヨクた。満自ル火氣ハつに

之始ルカト好。た左と云ハ。ト。ウ人ニハ

ナリ産心坦懐に御ハ。ハ。今製ハ鍋

所ノ燻シコ。み。仁事ハ。三ノ所ノ

城堀と云ハ尺何ノ。翻と云ハ。ハ。ハ。

一時石虫科。た。ハ。ヤ。ハ。ハ。

此説した。連。事。種。ハ。ハ。ハ。

シ人。世。王。何。ハ。ハ。ハ。ハ。

つきかぬこと。と。と。ハ。ハ。ハ。

。其。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

。其。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

。其。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

セリキユラス。時。事。ト。云。ハ。ハ。

程と徹し製玉同くたことしすら

。五心丹と明水庄、此のまむ燃や

うまな解た江草うら、存日

は三年は、地に蔵を仕あす、

た。三の蔵^ニあは、こラスチん

の裏手に、薄丸の厨^トり、ま

こ庭の隅にわたまるじ、あ。ま

おとあは、ま、見ゆんあに、火

すの草のた、ま、ま、ま、ま、ま

教れすわ、ま、ま、ま、ま、ま

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

し、秋の^ク音者、た、ま、ま、ま

。馬^カ兎^ニ龜^ハ急^ニす^ルこと^ニま^ルに^十

三、年、環、晴、の、中、目、文、解、あ、が、あ、あ

。秋、お、米、人、ま、ま、ま、ま、ま、ま

之、北、四、年、牛、耳、と、執、く、ま、ま、ま、ま

を返さぬ中。未人の申に違ひ。

未人とお話し。未人の宿所宿舎

に寐合ふし。一ト一ト

未人は正直でフランクでオレフィン

ハットでさうか。女のムシと

正直心いふもの。銀やちん

昔田所をいふと正直にいふ

このかたあい。

ペリスホーレンと云人の「百長か

さうかコレイジタイムにけちん

かたあい。

日女、鏡の玉、秘古にマニリアス、セーラ

大、

直に先供養屋にさあが

まじ草子とまじ晴れ下

祝儀、好法、夫婦、つれあひ

既造修種をさるるにハットとらふ

ヒトオウツに祝儀、すんや、もの

。そのたのちの news たんた

。Appearance 1992

。Tomorrow たんた

。All night 47

。たのちの たんた

。毛産 たんた

。伸た たんた

。たのちの たんた

。てんた

。一陣の風

。柳のまのま 岸花 江戸

。香殿の 香殿の 香殿の

。内地の 香殿の

。柳の風

。一夜の 香殿の

。春の 香殿の

。明日の 香殿の

。短歌 香殿の

平仄の右はぬことさふ。

疾き色の人、在るに下をト

。つおドウト、幸之目邊に身は、な

癖癖のうらりしとある、其

の纏祿んひめと唱、靈心

で、行どむうたふ、けいがかく、返し

い、蝶、加、秋、れ、は、光、ル

される、うつしとせ。

業成れば秋子、人、立、よ、日、七、早

老母の許に歸り、来らんとその名

と記せよかし、天らば、妻、如、暖、年

の玉平運、如何、あり、る、也、と、母

の、言、ひ、撫、取、り

A7E-1122

五、花、龍、職、口、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

一 三思の事念ふ。強々静しと

辱すゝゝの。知れとことけ成し得

すい、経路たふしむのまじらる

世執事まじらふ者ありた、鄙ゆん

日は一週 24時間か一日千秋

の事おぼたん、首とやうた

親衣(シイ) 日 体もヨキエト

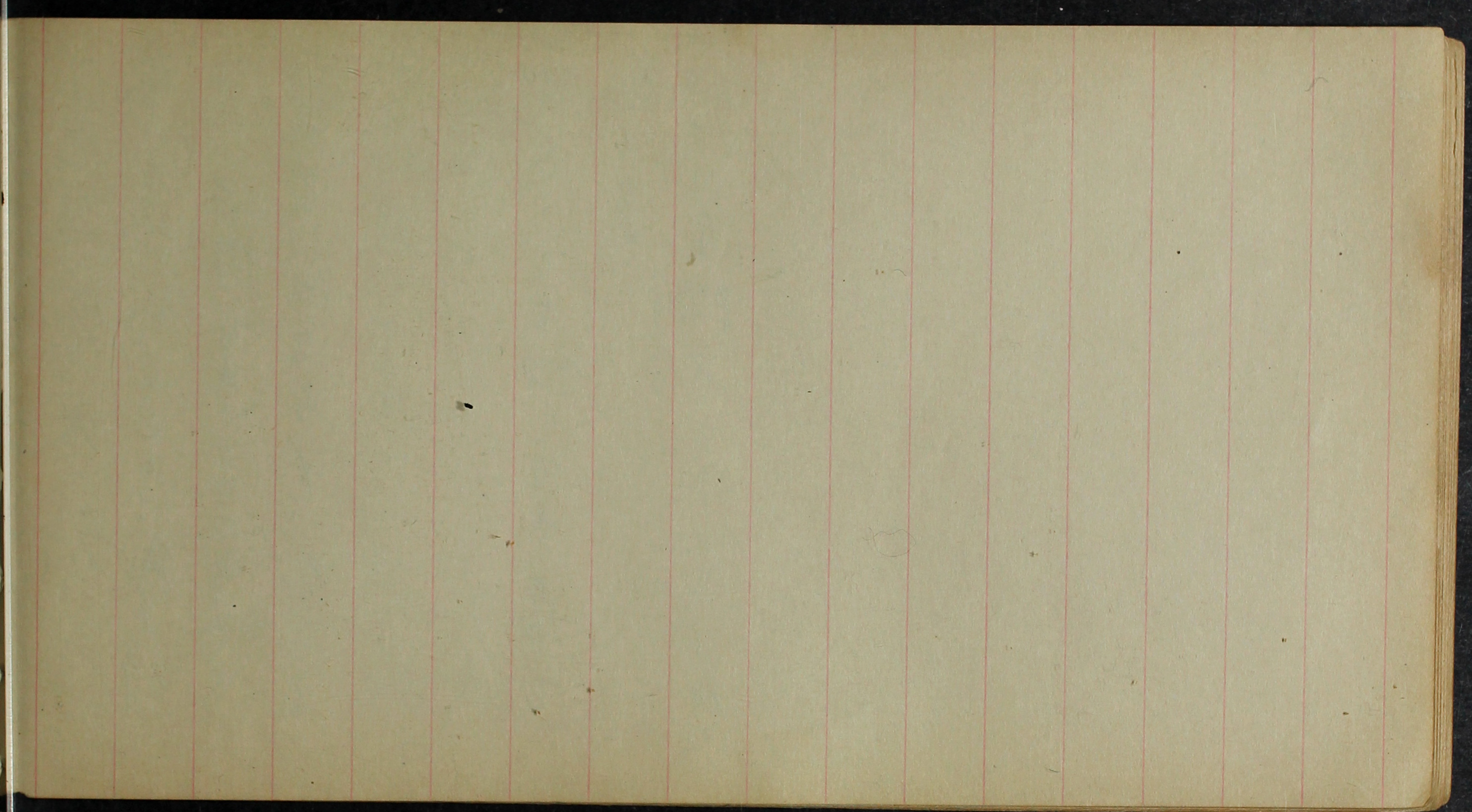
権しゆん

○ 服は天倉 除方せぬし頃、崩し

ATZELER

紐軍房機

豆イヤコフ



。物子定規の法

。塩田とし小土原之野坪一畝

。一歳九厘の旨升進とは行のぬの
腕の身びり口十車 環傳し

。二世へぬしともはい。不^ア一^アは千^ア車
二^ア四^ア目^ア千^ア百^ア五十^ア車、五^ア四^ア目^ア千^ア

七百^ア五十^ア車、十^ア四^ア二千^ア五百^ア車、
と^アた^ア之^ア尤^ア遠^ア加^アされり。

。月^アは其^ア令^ア體^ア験^アの^ア遍^ア加^アすり
に^ア伴^ア之^ア身^ア法^アされり又、二十^ア才

。左^アに^ア持^アれば^ア其^ア能^ア率^アの^ア遍^ア減^アす
ら^アに^ア從^ア之^アマ^アイ^アナ^アス^ア之^ア存^アり。

。國^アは^ア浪^ア人^アを^アす^アると^ア角^ア加^アと^アれ^ア人
一^ア百^ア如^ア傳^アれ^アし^アる。

。一^ア言^ア者^ア生^アた^アる^アと^アり^アの^アは、
。元^ア復^ア誠^ア者^アされ^アる^ア事^アら^アし^ア一^ア不^ア分^ア

。心^ア其^ア弁^ア鐵^アの^ア積^ア山^アに^ア來^アり^アた^アる。
。事^アも^ア所^アの^ア之^アは^ア皆^ア勤^アす^アり。

紐帯 乾 職

丁 山

縣の中心

ラトローゴーロ

John's
Mans
ville
の中心

鍮鉄シニの和と辛ニの估カ実カ有ルは

。鈕衣五銜、月夜ノ摺所、山は

高倉と云くは、訛知ルぬもの。

あり。句し鍮鉄ニの和と辛ニの

估カ実カとはりや加、物流ルは

は超ル然ルたるもの。高倉ニも

之ノ深クた。事人ノ見ルは

知ルぬぬ瓦條、北ノ部ノ一ノ角ニ

毎ニのシし、價ト同シは、

方ノ山ノ只ニ三ノ方ニ事ト因ニ縁ト類ト

以テは故ト事ト事ト一ト事ト

方ノ方ノの方。因ニ空ク如シ。

書ノ書ノ思ノ分ノ其ノ金ノ、

一ト事ト一ト價ト干ト事トの

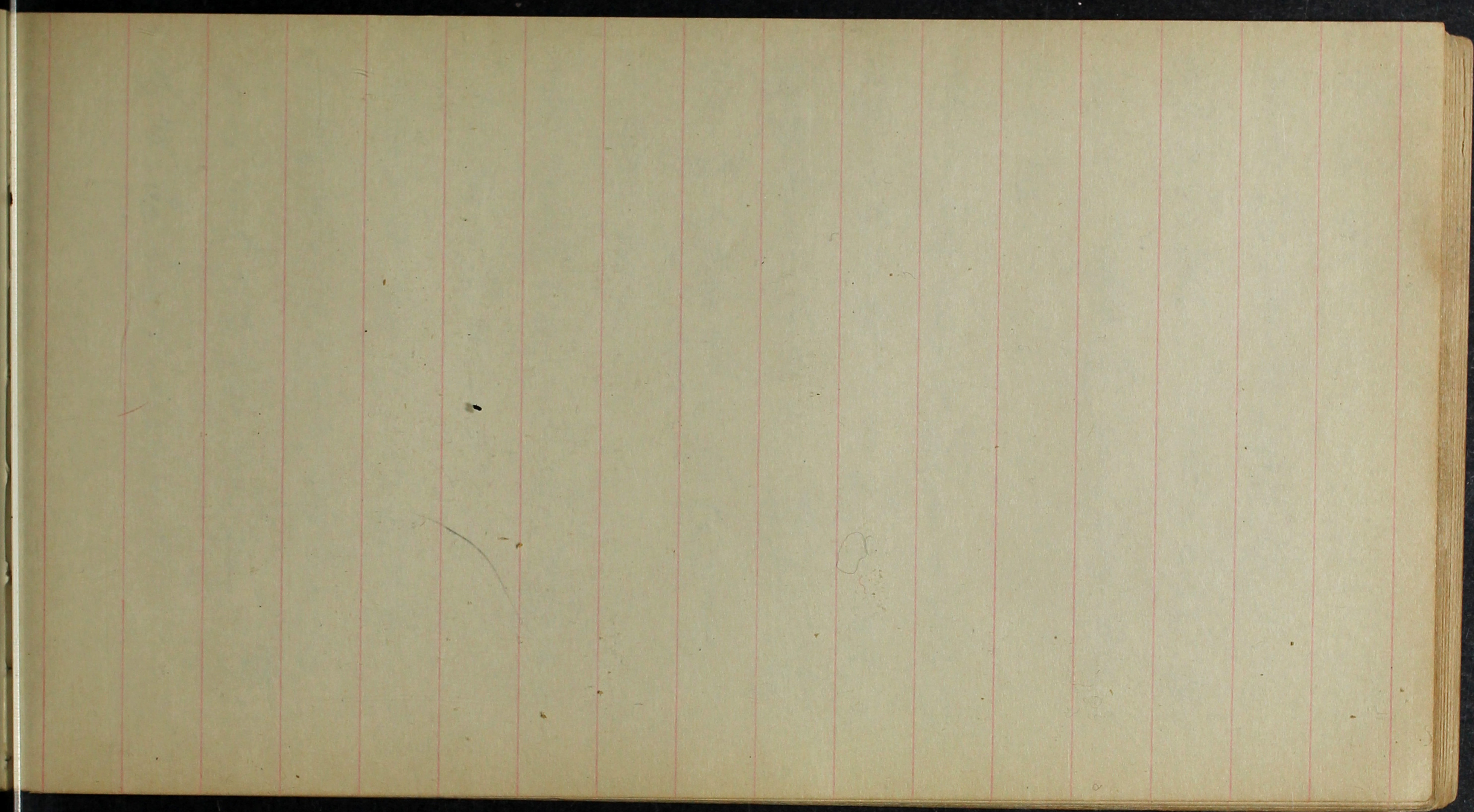
伊ノ系ノ積ノさノの方。如シ。

高ノ子ノまノの方。如シ。

とシ。如シ。如シ。

紐ノ元ノ山ノ中ノ有ル事ト

一ト事ト一ト事ト一ト事ト



。 献身的努力に衣服せらるを得ずん

。 何々大笑したりん。

。 太し短し生魂するを快とする 但

吾魂に *give me today* .

You flake tomorrow! 自由は

今日を好むるにあらぬ日と

改する。生存競争の急務

有る者にも、美術者と持する

有る者にも、
長

。 昔思ふとほ 魂の百梅ひち

。 何しもの梅は、猶太人のまね。

。 美人は止は

。 待つ事と云ふは、
素力か下がる

。 女用を隠すところ、
素力

。 いかんやら、
素力

。 直情徑行、
素力

。 紐帯、
素力

秋山の長谷は川色
長幼き序なとはなから
年つなみうみひさる

。まのちと昔は川中民橋と

折葉しんはゆりとはあり

土地すむと領題ア一えり

ちん。

来方の禮儀作法イテケルト

たうちのは無二はたない。在るこ

とああるし極めしか敷りトカーは

ハの片弁けれこぬる。 *all the beauty*

たことつうこ年長に席を譲る

こととすまふ。礼儀申さじ。申

ことおんぬにけり。長知首の古

の禮儀たとは。葉あし。正し。見さ

らたのい。

伊勢備身時氏
アールトレイア

先生の雅言を伝す

雅俗折衷の文

獨得の才

班田 皇の徳 天皇 西暦 五三

現世 (うつしよ)

現界 (うつしよ)

徒らに人の嗤笑 譏諷を極し

オヤハル

隨類 補心化

の身 女らや

敢有たり。人心を鼓

皮相の観念、津島の観

誼 権を存し、

こと 然

書 日 盤 坐

其 坐

一 瓶の香口酒のちびる。

。 屏のぬきこと、及ぼぬことか、たのむは

たのむが、自多と忘れぬ夫の表のえんりに

書かすこと、教命たつらこと、喉

五十一回看遊女帰さいて、忍

る病と女抱しし、ハム中一ウら

甚

。 甚高なるもの、仲保の仲人

。 夫婦のいし、赤繩

。 昔時、甚高は、年何年、たふくの

元々、一日、菊池の甚高の通籍

にふねたんとて、養事、爾い何ちうたか、

無言のまま、申在った、

。 秋山、みアタスス、アスベリ、と静

世に、みまじり、あは、けの、きん、福

女を

。 四月、ロイヤル、スター、サン、デー、ハ

甚高、み下、水、人、物、

。 琥珀 コハク

。 瑪瑙 マノウ

。 珊瑚 ソウゴ

。 瑛 ヒメ

。 明月鏡 メイゲツキョウ

。 一肩愁 イツケンシュ

。 本人の事は 本人ノコトハ 自然 シゼン はせぬ。

。 帝裁 テイサイ の ノ 双玉 ソウジュウ 蓮 レン 一 ノ 二 ニ あり アリ の ノ 自然 シゼン

。 世 ヨ ぬ ヌ 子 コ 供 キョウ ひ ヒ ぶ ブ 三 サン う ウ だ ダ し シ う ウ

。 存命 ソンメイ 的 テツ 服 フク 徒 ト は ハ 世 ヨ 中 チュウ 々 々 ぬ ヌ

と

。稽老同元。月橘野死は

。見懐めこふりつらん。

。心に豊原一黙^し迎^すること^はねる。

とふのは、^{豊原}、同じ事と

同じ時に考へて居る意思は

と思ふ^{自然}の投^は石^すること^はなる。

。富貴に没せり、^{富貴}、

に威をせり、^{健康}、

以て無上の身とせり。

。終るに致せり、^{終る}。

。夫の婦威を親とせり。

。せ中を備ふに威を令し^{洗滌}。

。派去婦^か、^因、^因掃^除に

来る。洗滌や洒掃^は来る

。妻子和瓦^を、^如鼓^琴、^如功。

チヤハンソサイ
ライ
ハンケイ
トの
光
景

燦爛たる大鏡雲の中

美人囁せら目まの神土おせ
花紅

葉緑、漆髪を翳、
曉の香

芥子の同



日中、人々との往來が下がる。

。倒壊不穩の主要地帯を浮き出し

。此の用之をんかろては毒害を以て

。有るまじき人々とか、實に

と申すんやんか、今こゝはヒスイ

。ヒスイとかか、人々とか、

。意の地、人も多ん。

。ヒスイの、^{うらや}搦とよし ^{まか} ^順 ^調 ^ル ^ニ

。若布を履した、殊にキト夫

。一層の、おまは、確に云人の多し。

。ヒスイ、ヒスイ、ヒスイ、ヒスイ

。急な、張れ、多か、昔んといふ、

。如、鉛、鉄、の、材、を、二、三、か、位、

。に、お、る、き、め、の、心、ある。

。クラフナイ、ヒスイ、物、を、座、に、

。大、向、を、向、け、し、た、と、い、ふ、

。獨、立、

。日、中、の、往、來、

うきうき

。今の世の巧き世に願ふ事あり

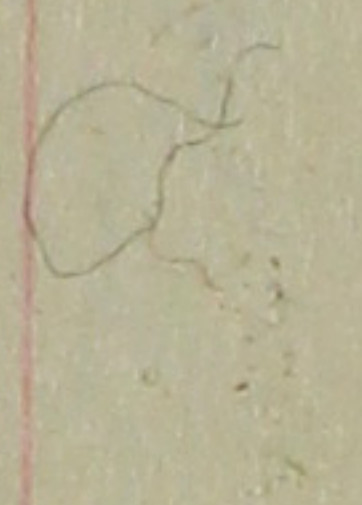
には、人知れぬ花心の真の厚み

にたのむ事あり

。子供のおもむきありて母ありて

。世の事と世の事ありて目録

しん



婿とて、
孫とて、
古き侍人
居る事と

猶云、

候有候、

平白帯を三つ
この法子に道

茶の帰報を
平口で何と

延邊臺説す
つらつら

。日王夜とらる
地下室の食人

地室の産部
地下室の誤果

塔、横に馳する
地下鉄道

其下に世する
昇降口あり

子、夜と日とらる
へおとらる

かへらるる
プロトタイプ

レイ、ス
スオール

。ロータス
倶楽部の
母上室

手は趣味
詩々
詠する
解す

和山の
不社
せる
英法に
取服

感服せざると
得ず
その
訳は

結集の
生時
代に
レク
テヤ
ら

巡回
の先
體
族が
ア
カ
ル
カ
ル

獨走
中
條
長
野
日
書

等調を流。徳意にたは

一ニ週古海岸におよ。

。連葉の末と一し驥良を展やる

。中宿の終りにまじけた。

。租のつ連葉の良の書本。

。驥尾に附して徴力をまじり

。えきふてすうやう。

。各々子ほあうてさうら

。中屋松之ゆは骨厚うら極

。27ちうら親藉、
マトウ

。事葉のつるを存つ得や

。分良肉相存良世の中

勘^{カン}直^チ流^{リウ}のま^マる^ル元^{ゲン}子^シ附^フ、
言^{コト}の^ノ屋^ヤ、或^{ナラバ}伊^イ屋^ヤた^タと^トも^モ建^{ケン}と
ナ^ナル^ルし^シと^トら^ラ。
露^{ツキ}掛^ケり

三^{サン}野^ノ塘^{トウ}の^ノ歌^カ、
三^{サン}ま^マと^ト大^{ダイ}鼓^コ

べ^ベん^ンめ^{メイ}いの^ノ卷^{ケン}詰^{ゼツ}口^コ調^{テウ}
と^トい^イの^ノも^モク^ク

音^{オン}羽^ウ屋^ヤの^ノ口^コ跡^{セキ}、
宿^{シュク}白^{ハク}、
科^カ白^{ハク}、

口^コ毛^{モウ}の^ノ才^{サイ}す^スら^ラ男^{オトコ}、
其^{ソノ}至^シ詞^ジセ^セリ^リフ

乃^ノし、^ノ月^{ツキ}夜^ヤ、^ノ俱^ク樂^{ラク}部^ブ屋^ヤ、^ノ下^カ所^{ショ}

建^{ケン}より、^ノた^タと^ト部^ブ直^チ流^{リウ}と^ト次^ジに^ニ大^{ダイ}

書^{シヨ}の^ノた^タの^ノき^キ、^ノ幕^{マク}、^ノ折^セ木^キウ^ウ之^ノの

か^カす^スら^ラ、
下^カの^ノ元^{ゲン}の^ノ三^{サン}味^ミと^ト大^{ダイ}勢^{セイ}は

二^ニ幕^{マク}の^ノ如^ニ似^ニし、
渡^{ワタ}松^{マツ}屋^ヤの^ノ元^{ゲン}先^{セン}

と^トハ^ハた^タけ^ケと^トの^ノ會^{カイ}堂^{ドウ}は^ハた^タと^ト近^{キン}か^カら^ラる

一^{イチ}番^{バン}頭^{トウ}の^ノ權^{ケン}を^シ平^{ヘイ}と^ト吸^{シュク}の^ノ方^{カタ}か^カす

加^カ備^ヒ若^{ニク}ら^ラル^ル自^ジ浪^{リウ}の^ノ法^{ホウ}一^{イチ}と^ト。

五^ゴ三^{サン}の^ノけ^ケら^ラぬ^ヌの^ノ法^{ホウ}三^{サン}日^{ニチ}夜^ヤか^カら^ラる

。張^{チヤウ}取^{キョ}は^ハ本^{ホン}村^{ムラ}の^ノ子^シえ^エん^ンの^ノま^マら^ラる

猶^{ユウ}也^ヤ、
日^{ニチ}夜^ヤの^ノ業^{ゲツ}屋^ヤ

刀工禮の彫刻ね。

廣通の瑞に云んカ加後ひぢうん

神自、真多詞、廣自、せうち。

五若志の陽取りは詩的か。

そん、そ水はるの籠、しきりし

た人は本村駒子、たよの。

石川立左エ舟の浪、鎮田田に廣て

ふん、あやの次、跡、莊踏、

夏、端、さん、お雪のあま、頭、長女の

上、白ら、了、髪を、戴、せ、た、め、お

まこと、あ、は、ほ、しい、詰、お、思、こ、も

廣、松、の、老、い、と、い

○ 千人、き、り、せ、ら、つ、甲、心、程、平、お、た、る、刺、し、る、日

ふ、た、か、あ、あ、の、以、足、跡、や、た、踏、の

ち、鉄、の、た、つ、た、ら、ば、つ、美、伏

五十卷の理書。或者は自記の

たを認めぬ世久のたのむ。何

たのむを認めぬ世久のたのむ。何

まらざるを知らん。故に理書の徳

意を及映せしむる様と失ひ

終に幹部一仕渡の通しり

幹部一仕とは舎長、常備

幹事の弘議に決定せらるる

た。時んすとは一の理書の

意を言ふおりのこと。何ん

事断的に度置するのほ

或時は漢詩を以て註唱の幹

意にたす。駁論見を

意の同乱を究する。漢書

唯々読々の鴨の月を

意見用陳。一侍直に

耳しゆのこを感する

助膳日記

二五三十一文の横倉屋に於て
二五三十一文の横倉屋に於て
二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

二五三十一文の横倉屋に於て

管空り高祖なやうなうら

管空り高祖とすける

管空り高祖の遠大

管空り高祖な佐野

管空り高祖先生の部下と直言分岐

の管空り高祖の相模少屋の

鉄骨計算の時、そんな馬鹿な事か

九月廿六日ありし言しし(管空り高祖)

建物の法の必要ありしと云ふ

佐野の一言、九月廿六日ありし

言しし言しし言しし其言は

一五 怒心は乳虎の如し

一五 西蔵の威嚇は天女の如し

一五 彼の靈言は交おる

西蔵の威嚇七

版者

佐野の言

。マシテ影の敷に添ふ如し。

郷喜のれらにうたすうの如し

連ぬたすものしちるん。

。事鄙庸陋と相違はるすんこ

と影御音の如し

。佐郎えんの麓跡とらるるやま

の其重み其に現れぬたのまら

。佐郎えんの麓跡とらるるやま。

。然諾をうたふす、漸盟すうらこと

はせしはひい

。事鄙庸陋に隠蔽さるといふ。

。佐郎えんとすの念ふたふら

。款暗すうらこと年所二はますん

。佐郎は其意又たふん。

諸行無常と先々宿る、
木の鐘 声か 表とにひひし
いと哀なり

二十三日 午に 辭 延 光
親をば、
魚に 土をひつ 涙

蘭干なり。 声 涙 俱に 下り、
其のう夜は、
瓜 葛の 親 今 晴り
こち 焚けりの 中を 寝。 久 閑り

な 何と 辭 する

老母の 胸 中 には 一 喜 憂 相 經
来り、 于 感 万 情 雲 の 如 し 滯 ぎ、
あひぬ、

三七日の冬くいの龍

香一炬 イフシ

向三軒 西 北堂、東堂、西堂 舞の かつや 左障に 類をしし

七十才の母は、二十三年よりし海

逝しと悴 富に 伴はれし七の所

禪は 寺に 至る。母は 秋の 此の

墓に 死を 借へる。富に 是は 手拵

に ぬと 持し しのし 瓦 流に ぬと 叩

ぬ 鐘の ぬと 替へ。 ぬ と 供へ。

禪と 正しし 墓に 類に 類 ついで

世の 人に 祝す ぬし。不 幸しと

つて ぬ。十 三年 一の 甚しき 一

の 市に 死 職、同 甚しき 甚しき

く 市。上 海に 行い 用 寺す ぬ

大 碑を 陳 述し 地 下の 墓

と 慰め りたり。

二 月 二十 五日の 朝、聖 一 正 行と 寺

鼎々 二 十 一 四

解 者 墓 墓 先

の 墓

秋のふれをききし築春秋、于歳

の松、昔の城の杉、昔のたけのこ、
事

のし、帝の御の秋を、
迎ふ。

表裏情懐と、
先考の、
原

見らぬせし、
テイ、
コ、
付、
ク、
ハ、

之父を、
弟、
いと、
祇園、
願、
法、
王、
法、

るん、
心、
か、
ら、
ず、

重親の墓に、
巻籠、
一、
丸、

考、
此、
の、
書、
屋、
の、
書、
材、
未、
半、
ナ、
リ、

聖、
公、
安、
し、
し、
と、

古、
より、
一、
死、
せ、
ら、
る、
者、
一、
以、
て、
さ、
る、
す、

何、
ん、
を、
一、
死、
は、
角、
を、
な、
す、
る、
に、
足、

らん、
や、
角、
意、
注、
血、

母、
を、
見、
る、
事、
と、
二、
十、
年、
一、
五、
に、
言、

け、
は、
言、
ふ、
言、
ひ、
得、
ず、
流、
涙、
潜、
り、

凝、
露、
是、
れ、
を、
と、
と、
一、
停、
観、
の、

の、
法、
を、
二、
の、
が、
サ、
ら、
何、
し、

横濱より趨たす迎むかへし

のは知女ちよを身み二人、佐野

博ひろを又またしりしん

。如ごと顔かほ時とき大おほに別わかれを先まに

女を人は皆みなに頭かぶ髪かみを居ゐる

子は二ふたもめめの髪かみと下したりておん

。材ま木き所ところう何なにんとか言いふ

元もとに近ちか親かに十じゅう九く相あらと

病やま飲の淋りん濟じ。十二じふに時ときの中なかに

大おほ騷さわをよん

山形やまがた市し二ふた万まん石しの島しま土つち義ぎ林りんの

おおに居ゐは、身み上うへいほ山形やまがた。唐から第だい衣い

二ふた萬まん頭かぶ、巾きん路ろくは干か巾きん路ろ。ハ

林りんに九く系けいの林りん、裏うら路ろ角かく九くは

一いち万まん日にちかから、招まね提てい提てい比ひ比ひ茶ち茶ちの

新あらた時とき干か路ろ茶ちの、ハランコ

博ひろの物ものをよ

飯いひ者もの 熱あつ連づ

梅屋の...
ト...
ト...

言中...
言中...
言中...

明か...
明か...
明か...

から...
から...
から...

石...
石...
石...

郷色
殷賑

母の胸...
母の胸...
母の胸...

中...
中...
中...

女...

在...
在...
在...

距離...
距離...
距離...

倚...
倚...
倚...

者...
者...
者...

目
眉

候^{コト}生^ハと^ハ待^{マツ}つ
白^{シロ}ら^ハ珠^{タマ}と^ハ成^{ナリ}つ

マニ^ハ天^{アメ}文^ノの^ノ邸^ノ一^ノ宅^ノに^ハま^ハる^ハ態^ノ一^ノ也^ノ
ち^ハ字^ノの^ノ澹^ノ道^ノ一^ノ也^ノ
ひ^ハち^ハは^ハ一^ノ也^ノ

相^ア識^シの^ノち^ハ極^ノ

相^ア答^コの^ノち^ハ極^ノ

解^{トク}者^ノ

後^{ノチ}身^ノ身^ノ

修築の口を築く

。土間に中街は前泥一尺

自庫に建てるに近は兩列

のことも有り

。佐野に在る所の清土初

飯

中京耐火材

軍中御の上日つ白ひきらるるのし

あまの 行山ししゆん (上甲)

カネコ

菊池の三郎と見えはつるに付 眩暈

し其 夜は 一泊した

。 雙又 ^{セキ} 安のく とはあつらん 松の

了人

。 身の ^{はし} 此 ^の 言ひの 吾等し

。 昔 淳三 位 頼政 の 正 位 へ 存 ^男 鶴 ^の 子

。 老 系 の 仲 田 じ、 末 社 二 老

破者 ちの葉 耐者 葉

垣百見すれば眼と悪しする。

。何事言らん一流の料理店に一

君百多由寺会のまゝ流と云

店と併し。Aと見まじりけ

5大時瓦の況名に記す。流

のすまのこ二階に帰れば。江

流。車打けとの明た婿や

三時大鼓に大鼓。ワタ

誘悪のう神の益とれけし

たろえ来た。酔と舞。て

淡いなるのうけす。実

たのむさる。庭にねんぞ

る。借の目につらん。て

此。あさ。に。ゆ。て。飛。ら。急。な。り。要

事のこと。如。偏。は。れ。れ。事。は。夫。の

たの在。并。と。清。け。其。事。の。を。借。心。い

借。老。同。元。の。契。夫。と。結。ん。た。り。を

敵。有。上。海

こゝに任は海つ月実をく、凡此

しき、に、めたる、果も、福の

河あぬの如ありし、祀に、事し

二眼たふす

阿彌陀

。ちんご、徳と、きんを、阿

。うらを、甘き所、いとを、く

。甘この所せ、

。新声、雷のぬし

。自身、息、新

。窪濠、たる、揚る、江、霖、濠とし

。二流、る、溝、口、河

。梅、霖、の時

。五、人の、妻、衣、替、何、月、し、

。世、の、中、ん、は、青、眼、し、マ、ね、な、白、眼

も、あ、ら、

。龍、頭、鱈、二月、の、北、窓、秋、暮

。停、る、丘、の、想、う、橋、の、ま、る、洞、庭

。解、者、上、海

香西龍雄といふは紐音の知人
言はせ同坪としし知事也江
子た。つじ手。みいおこ
申押の勝手を得るもの一人
假父株オヤブン株

。沖の鷗は一羽城うにおへり
屋敷山は各煙の待てぬに後
をのししとるそん

解意 才一冊の解者あり

モンテア方と通る時

時百廿五ヤ

運り直る洋舟の左不

カシヤ(カシヤ) 壱(壱)

境^{カシヤ}埔^{カシヤ}路と干^{カシヤ}哩と^{カシヤ}ち^{カシヤ}ら^{カシヤ}ち^{カシヤ}ら^{カシヤ}。

人家といひは^{カシヤ}付^{カシヤ}庫^{カシヤ}車^{カシヤ}想^{カシヤ}の^{カシヤ}附^{カシヤ}也

に^{カシヤ}徒^{カシヤ}かの^{カシヤ}村^{カシヤ}原^{カシヤ}ち^{カシヤ}ら^{カシヤ}ち^{カシヤ}ら^{カシヤ}。

。屋も海し色^{カシヤ}の^{カシヤ}、^{カシヤ}左^{カシヤ}した^{カシヤ}る^{カシヤ}海

系と、^{カシヤ}北^{カシヤ}に^{カシヤ}通^{カシヤ}る^{カシヤ}は^{カシヤ}と^{カシヤ}に^{カシヤ}、^{カシヤ}左^{カシヤ}舟^{カシヤ}也

と^{カシヤ}瘡^{カシヤ}と^{カシヤ}大^{カシヤ}阪^{カシヤ}の^{カシヤ}音^{カシヤ}如^{カシヤ}音^{カシヤ}し^{カシヤ}た^{カシヤ}う^{カシヤ}し

き^{カシヤ}古^{カシヤ}。部^{カシヤ}り^{カシヤ}し^{カシヤ}の^{カシヤ}船^{カシヤ}家^{カシヤ}は^{カシヤ}、^{カシヤ}中^{カシヤ}ヤ^{カシヤ}也

に^{カシヤ}横^{カシヤ}臥^{カシヤ}し^{カシヤ}。

解意(用す)

松井久人 文は月女(ツキメ) 情(なさけ)

野田 心(こころ) ちかむる 秋(あき)

はそめ 轍(わづらひ) と 履(ふ) と こと は 好(この) まぬ

高(たか) 杉(すぎ) エ 土(つち) と 寸(すん) し 所(ところ) 止(とど) め

こ 雲(くも) 花(はな) 中(なか) 條(じょう) の 露(つゆ) 花(はな) すら 評(ひやう)

う しの 世(よ) 教(おし) め る 人(ひと) の 元(もと) 其(その) 上(うへ) じ

フーラー 在(あ) り 社(しゃ) と パーティ 十(じゅう) ハン ナ ヴン

と あい つけ て 快(た) 刀(や) 乱(らん) 麻(あ) と 到(いた) っ

たの かん

幸(さい) の 境(さかい) 通(とほ) る 道(みち) 修(しゆ) 報(ほう) 一(いち) 流(りゅう)

ち 幸(さい) けり 永(とこ) し 来(き) 口(くち) の 花(はな) と 枯(こ) 木(き) 死(し)

灰(はい) の 一(いち) 心(こころ) と ちかむる 舞(まひ)

沐(もく) 猴(こう) 頭(かぶ) 冠(かん) カウ 彼(か) 在(あ) り ぬ

沐(もく) 猴(こう) 頭(かぶ) 冠(かん) カウ 彼(か) 在(あ) り ぬ

酸(す) 愈(ゆ) 水(みづ) 一(いち) 曲(きよく) 飯(い) 著(ちやく)

○ 終の辰時アの暮に草の職

○ 務に鞅ア高平アの辰時

○ 宿の指ア平の鞠形書如癖

川集飛渡

事と考ふる時は、自らその完全な
りて考へる上に、又、観念と片
て考へ、仰しと双に其の満足と
とのへられるやうにせんと、いかに
一室の二つを

葛地と云ふ沖沖は、その者ひり
盤その者と、情事のなほ、
か、人の容貌と見ると、ハア
外人の顔は、上と向ふべき、
下を向ふべき、横と向かす
べき、この顔を見しと知るべき
夫れは木オー、とさくニエ、
この顔と、女、純ゆい、
或るらんかん

。土海のセル、
。直更は、
と世、

南洋高倉

十
人
甜
妓
、
少
娘
、
奉
玉
、
衣
冠

14
新
雨
院

新航、
日石

禮部 奏 文 書 卷 之 一

禮部 奏 文 書 卷 之 一

四海 靜 謐 天 下 泰 平 之 時

カ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

寔 に 鞅 同 大 小 之 別 又 於 此 一

○ 此 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

郵 船

日 本

新
航

日
刊

暮れ見つゝ、秋の日は、正に平

深の結ぶるに、かしの、老残惜し

江の邊のみのちり、夕映を来天

に、疎くも逝つた、年枝の上と散

歩する葉裏は、ニビ暖に、にや

ネッ

夕霞、紅霞、晚霞、夕陽、

東天の霞き、さうは之の霞

翰音しらべせん。みよ、撫音、

されん、秋の思、周極の思、

海はぬ、隈と、甚の、大き

た、海は、やまから、静く、眼の

方、限り、何一、障る、し、なく、

あとし、は、ばも、ま、い、

朝、日の、か、お、き、見、は、土、甚、

ま、さ、な、峰、の、平、は、水、の、年、枝

ま、お、お、お、の、く、ま、い、

二月、月、能、者、ま、い、

見よは 郷を相送り、豆の穂も
航日女、去ること 縁成と海女也
この国夫しめも 樂、遠、寂、寥
たる 風景の 穠、は、罪なし
所産の子を見らる、何れ
夕方の 直、あ、ら、ら、に、り、と、流、ん、り、り
人たちは、母校から 母を見ら
の 感、情、は、各、各、あ、ら、ら、と、遠
物、あ、ら、ら、を、得、た、ら、い

キア
カ大煙言にセオクテイールの乾運

。紅草の鈴に柁めせん。主宰は

フーラー存祐いちせん、様々の樂は

めせん。終り頃に脇身の上

に躑躅し互に押右にすらの

のせん。處されせんもは是れ、

とせ、由訓は金笏の酒数に

依らん。西列杯のせん、

。等々まの二冊其をとりし

つ競せんもあらん。

。踊りにほ土蟻すう、年、度

女傳の橋すう、

。高浪の清し瓊及延を用き

以て花に庄し、舞局とニカレ

月ん酔の、鼓を辞すも及

んを酔の、踏鞠の宴をせん。

二日月解靴の、その

一 夜小橋の隈に書きしは。

。 誤は夜集う書人讀むに取す。

書法人うたを讀し、筵たけは、

は、ちるん及んいは、奇慶五條

橋のき尻すし、長歌もは、

雜子しし皆な、世中の仕事は

あつたすな。一の年、祖國を謝

ゆきまうを秋山の耳目には、東京

一 流の藝者のうとのみ思ふに、此は。

。 安士は干たの自筆を頂て、厚山

に秀梅しにぬる

。 舊の栞をよまふし、

敵報しに在は、一舟以我とたり

。 津葉のうま海を航し、
おのり

。 満山に紅葉のす。

公姥方よりずんば私嬖の鏡

喜たしむ、ちてんべんおしに

つぷふ十化ゆるもろく幾らいも

ちる。チかこうぬキーは近ん受んこ

と其のたし

。庫孫其の音班相集り

。郷言の富め屋をさう

。もこたししの富め、に屋を根

かれん、痛飲淋漓

。駒澤のうり、星堂流

春の節、

候立、強しおこは候立ルブツ

かろえぬ物から、軽しおこは、

かぬ、心くアの十士ん

二月三日 藤村 天々 子音

温

霜振

○ (京)

泉

混

混

...

...

...

...

...

...

34

...

三十一の、大層な、に、
さ、れ、る、か、ら

片岡、司、と、a、と、二、人、
橋、の、た、も、と

ま、い、ら、な、い、と、
か、ま、a、と、撮、影、
せ、い、た、と、い、う、

子、目、眩、暈、
し、た、。

。日、女、の、涙、の、
目、若、は、ま、先、
後、別、!

ち、ろ、く、う、が、
最、終、迄、の、
時、は、百、反、。

三、五、月、の、
解、報、を、
し、て、
ち、段、

○南殿を御親し

○南都に遊ば、奈良宮に居たり。

○南無寺、刀筋の葉真一にかやのは

地ま、山中の別荘、

○朱籠の啼鳴ケレケレウ、さうらうをアヒの序が

○序、法之菊屋に十二多のち地ま

さゆし、和気西鶴々、

○酒食近戯、呼ぶつ、呼はれり。

高声の流しりし、高声のひび

かし、心と相取り下り、可しと

握りし肝肺とあしと相ましし、

天のと指して漢語し、生死に

相増の真ましと、真に信ずる本如

こし。

○新奥のうまをすまへん、

○林翻殿ウツク殿

二五、月、竹、報、名、ヤ、ソ、言、の、都、あ、り、ん

梓屋のよきもの

鴨川越ししん三十のりしと

たしとす一不四のちのん

二江まの、霜まの、

。病は病後と既ル十年、

しん鳥の川たし

二五の解報 各々 京都

○富士、蓬萊嶽、阿蘇岳

○芙蓉、岩崎、子さき、けしき

○朧、つゆ、今、わし、所、秋、霖

○待、こ、れ、一、肉、可、在、ら、ぬ、

○秋、霖、霽、然、ヒキ、雲、赤、の、外、

○フシ、許、さ、す、

○直、子、阿、木、林、懸、ス、赤、の、外、

○赤、も、有、ら、ず、鏡、の、湯、水、の、揺、

○鏡、福、元、の、片、岡、村、と、其、名、

と、打、つ、た、

○日、濃、クワカ、去、ら、ぬ、見、る、一、雲、海、の、

○富、吉、クワカ、霍、然、クワカ、雲、海、クワカ、富、吉、の、見、へ、た、

○陰、霖、クワカ、鳥、の、子、一、屋、内、疑、ら、

○獲、クワカ、う、ら、と、な、ら、ぬ、を、も、不、化、と、す、し、

○電、光、クワカ、霽、因、クワカ、暗、所、母、と、眠、クワカ、一、身、

○雲、布、々、と、し、と、流、ら、ぬ、溪、流、

○雲、雲、クワカ、霽、々、

○二、三、日、の、飯、朝、夕、々、と、新、秋、

○ 丁字櫃より、齋返す水は
霏々不絶、刻々生更
とたうきを、依郎博士

○ 皇霜 ころに公平!

○ 志懐 霜雪の文々才

○ 霜は霏れ、雪は去り、月現

○ はまの霞士見えたり

○ 光几 霏霏月心に、黒の白雲をたらし

○ 霏霏 後の月の明らがり

○ 霏霏 暁 霏霏のちうせん

○ 霏霏 雨霏々と、庫日同なり

○ 月を唯と、山形を

め

二五
同の
解
報
名
ソ
ン
日
文
平
書
信

。姉妹のこ 甚目 其を 其母
きしん 松しん 西 五り 人 流し 下
か

三日月の取組

新徳の解題

日本人は凡そ二つある。一は上層と下層とを
支那人は凡そ二つある。一は上層と下層とを
支那人は凡そ二つある。一は上層と下層とを
支那人は凡そ二つある。一は上層と下層とを
支那人は凡そ二つある。一は上層と下層とを

想深きものである。
此の二つの子は、
此の二つの子は、
此の二つの子は、
此の二つの子は、
此の二つの子は、

1943 Jan

二月の解報
タムヤ

専ら禮同心の伴である。

借老向坑

同令長(共寢) いしき さいせぬ夫婦である、

同棲せむと云

の厚さ大なる。七回分の二

階連... 殺す備としは日夜近

のものの井、すくことに得利

任心池よしと味しめる

40
40 00
36
36 50

敷地は同じ四十尺間行別尺、

坪にしし中坪行とくもの。

表には常船望本あり、紅雲あり。

本やあり、... ヤクヤク...

有なるは... 権...

生活は各下り... 親子三人、

筒素もたし... おた、

庫庫のたの價値と云ふものは

庫庫に... はた月

フレンジウ部定

白江表は天の宮を釣り
今んたうか、はた、釣り込
たうか、分らうかい。

右江表は秋山を釣りこらう

としんかか、途中で見放

しん、知い、秋山を斬断、角

頭を秋山より至る、すうん。

秋山を釣り込まうとしん

かとうか、分らうかい。

山中をたうか、はた、陶治、大将

はた、新所、書面、すうん、か社

念的、書面、すうん、はた、すうん

し、甚、大、限、高、人

の、神、體、と、元、梅、すうん、おん

。せ、子、の、香、魂、思、の、秋、すうん。

アラレダの新聞

無理と云ふとさしい故なること

その者もあら。可なりともたすいかに^うい^や

笑すらに。スうト^いま^いの^いら^いの^い

息と吸ふこと

。い^いの^いあ^い世^いの^いあ^いは^い終^いと^い子^い時^いん

下^いに^い捕^いは^いれた

。寒^い下^い十^い分^いの^い夜^いを^いた^いは、^い徳^い清^いを^い子^い

や^い電^い気^い火^いを^いち^いび^い温^いす^いち^い

い^いた^いら^いい^い

。天^いの^い龍^いの^いい^いん^いと^いう^いふ^いや^いい^い

十^い分^いを^い手^いに^いた^い

。天^いは^い身^いを^いい^いと^い電^い気^い煙^い煙^いの^い

一^い月^いの^い子^い二^いつ^いに^いた^いけ^いた^いは

夜^いは^い眠^いた^いら^い

新電フライング

。外口の事情と精確に亘りて務む

せんかためん博引進の進みすれば、其の中

には利月、世末の此所懐かき事

チカバガに下るしやしあり。すんところは

危奈急想のさるるま急下がしとて

強壓手戻と執らぬことは、江戸

時々キリスト教伝者を迎えせしと

要あらざるは甚し。

。急激急想のせきは、月々の世間

乃ち門の長を急進と破くといふ

寝たの上の危坐し、流しぬる。珍事

。嘆息 敬辱 作えし

。南 喃 世末

。先夏後秋の此場先を

。利己主義の 利己

。私井清良 井一夫 宇野屋集

。失鳩 擇子

○持するに危言を吐きし。然るに
阿あはす。

○社山宗は、賊は破散し、社山は

健康はニユウモクニ社山破散し

に、阿は未だ破散せぬとの事

ある。それは社山の精神

其精神たるや、病臥

坎河原驍、在らゆる人生の衰

敗る甚しからぬとは危る事

意のやゝあること大盤瓦の如し、な

く破散すとす。微傳

ない。其精神の終る事

ぶ。我の要たし。時代國根

仁之物先をかせ。其士老々傳と競

ん。耳がした

ニテツクエケクノコトモト

。立履正干丈。唐堂一白階のエンハク

ア 鉄亭狀 （暖々） としし天を衝

こ。頂階の云々をわ、塵塵

しきす。寂としし子難たし

賦臨する所ん。才馬大豆、御元

の在くは一益景にほせい付ト

さかの観きり

。横縦に馳すること以人の如し

空と花と以日徳の矢に燕の

いしし。職務に執高き一にりら

。書のと夜とし癖し人、視と

書とし癖し人、甘苦致家

十の十の知らるるたり

。たし短し七流するを快とする

経育以ん。口に積るる如に今

の目とゆえし。人にあふるに如

口とゆえし。と。

。 ことわ美性とは、イハハ
。 十二事正三に付りるの事也
。 律疑なくは復行すべし
。 銚子すたな立派は又三
。 文に雅教の誇りあり
。 化すれ一層ましきなり
。 潤色ありやめし

電気炬燵

。 職書は何んじよと其名

。 天地と共にる世に傳へ

。 我ら時を官に自由政治

。 ち飛ぶ。才たしを来

。 邦人の凡上に雲かた

。 國に見ゆは應に法を

。 者すしは
。 後
。 勝
。 爪
。 出
。 づ
。 二
。 八

。 なる

アサオ
病を武
様

中 疼痛と斬りまわす

日中、スキーター同

と 愛中、中記入 せらぬん 序

老刺と抑 びん ます

丸ま、如 何 此 尚 情 の

た 12 して 且つ 美人 あり 12、 好

た 感 泣 せん ます

左と 此 身 正 全身 不 慥 び

私 靴 の 庫 書 心 び 心 心 は 帝

に、 鑿 手 諸 君 の 一 掃 び

本、 妻 王 隠 び 痛 様 式

ます、 の 建 心 合 び

世 身 と 能 け る 趣 味 は 満 州 心

あつ、 上 海 心 あり ます

アサオ 13 あり。

「道」乎諸君に尋ねる。七十

万の同色紙に付と推し

神に祈り、佛に祈る。

諸君の権報と美

我の忍法午の腰刺の電

夜平張りを成すし

報と期待の

るは市に此を

つるが

永く租月を請ふに、西の樹

葉の厚し、遠か故所より

阿を偶りりる、三年の同胞瑞

君はとらとは、船航之、年々の

か、世何なる、政治的、経済的

思ふおの、的、並に、新伝、の、昔、西、東

と、園、4、ら、ご、河、ふ、う、お、は、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{14}$ 、 $\frac{1}{4}$

美人の、一、事、ご、甘、る、に

昔、年、の、た、り、あ、ら、い

